

哀 悼

平成24年度総会案内の返信ハガキ・その他により、次の方たちのご逝去の連絡がありましたので、ご報告いたします。

ご逝去者	卒年科	ご逝去日
浦井 宗治	昭和12年機械科	平成25年6月22日
木嶋 多門	昭和16年電気科	平成25年11月1日
佐々木一明	昭和24年電気科	平成23年8月16日
後藤 静雄	昭和24年土木科	平成17年11月21日
三田 高義	昭和26年建築科	平成25年9月
飯塚 要治	昭和27年電気科	平成21年1月
堀谷 孝男	昭和28年工業化学科	平成23年4月4日
畠山 軍司	昭和29年機械科	平成23年11月
小松 勇吉	昭和31年機械科	平成24年12月3日
佐藤 進	昭和32年機械科	平成25年12月1日
斉藤 金世	昭和35年土木科	平成25年9月16日
伊藤 忠	昭和38年冶金科	平成22年10月12日
加藤 久美	昭和39年建築科	平成25年8月1日

心よりご冥福をお祈りいたします。



編集後記

今年は、母校の110周年。110年前の1904年は明治37年で、日露戦争開戦の年であった。鄧小平や軽音楽家のグレンミラーが生誕し、中学校の音楽で習い、秋工の吹奏楽で演奏したことがある「交響曲新世界より」の作曲者ドボルザークが没した年である。

その4年前の1900年は、横手で教師をしていた石坂洋次郎が生誕している。

4年後の1908年は、米国で初めての量産型自動車、T型フォードが販売され大量量産化技術の発端となった。また清国（中国）では西太后が没し、西欧では指揮者で有名なカラヤンが生誕している。

母校創立当時の前後4年を見ると、歴史の転換点であったような感じがする。とにかく110年は長くて重い時間の流れで、当時の母校創立は工業立国としての一翼を担うため、如何に期待されていたかを計り知ることができる。

ところで東京秋工会が発行する会報金砂は、本誌で22号を発刊できた。これからもしっかり継続させて、母校の歴史と共に発展させていきたい。

編集長 嵯峨 良平(S43E)

前号から始まったタロンペコーナの「時代に足跡を記した大先輩」に、2回目として金子洋文について記事を書いた。

この記事は、私が秋工2年の時に秋田県民会館で聴いた秋工創立60周年記念式典での金子洋文による講演の印象が記憶に残っていて、足跡を記録しておこうと主にネットから情報を集め、2011年2月に東京秋工会のホーム・ページ記事として投稿したものを元にしている。

秋工機械科を卒業し、教員となり文学の道に進み、日本プロレタリア文学の祖といわれる「種時く人」を発刊し、国会議員を務め、劇作家としても活躍した大先輩の足跡を3年振りに会報KANASAでも紹介出来た。今年母校創立110周年は、県民会館での記念講演からちょうど半世紀を経たことになる。原稿を依頼してくれたコーナー担当編集委員の船木氏(S48M)に感謝したい。

副編集長 赤川 均(S41E)

同窓会誌の中でも、東京秋工会のKANASAはよくできているほうだよ・等と飲めば自画自賛したりしていますが、テレビに例えれば視聴率が良ければスポンサーが喜んでくれるようにどれだけ同窓生に見てもらえるのか、もっと1人でも多く見てもらうようにするには、どんなところがポイントなのか、もっと参加型の会報にできないのか・等などがこれからの課題なんだろうと思っています。

そうすれば広告主の方々にもたくさん喜んでいただけるだろうと思案する日々の広告募集担当者です。

副編集長 伊藤幹夫(S46A)

5月の連休も仕事の関係で世間で言われているG.Wとは無縁である。丁度この時期は会報金砂の編集記事・寄稿が集まる期間でもある。母校が活躍している記事、OBの活躍、又、多彩な趣味の紹介等興味を引かれながら目を通して。改めて秋田工業高校の歴史の重みを感じながら在高当時を思い浮かべる。

副編集長 下總 勉(S47A)

今年3月、40年来の親友が亡くなった。秋工卒業後、最初に就職した会社の2年先輩であったが、そういうのは一切関係無しに、常に身近にいてくれた大切な存在の一人だったことがあって、ちょっとばかり喪失感が強い。

今号の哀悼の項、ご逝去者に、浦井宗治さん(S12M)、小松勇吉さん(S31M)、佐藤進さん(S32M)……のお名前。過去に何くれなく声をかけていただき、ついこの前まで年賀状のやり取りなどもあった先輩諸兄のお名前をこの欄に見るといのは、何とも淋しい。

ともあれ、今日現在、無事に生かさせてもらっている自分である。そんな自分のなすべきことの中には、東京秋工会と会報「金砂」の末長い継続というのがあるのかもしれないなどと、手前勝手に思っている次第。

副編集長 船木一美(S48M)